

高血圧診療にデジタルを活かす オンライン診療の現状と課題

Digital transformation in hypertension treatment; current status and issues of telemedicine

谷田部 淳一^{1,2}

1 一般社団法人テレメディーズ

2 福島県立医科大学腎臓高血圧内科

JSH2019で降圧目標が引き下げられた今、管理率はさらに低下している。ポピュレーション/ハイリスクアプローチともに、新しい方法論が必要である。最も注目されているのはデジタルツールの活用であるが、その実装に向けた戦略を考えるうえで、医療側、患者側、行政や社会環境に問題をセグメント化してみたい。

1 医療者が考えるべきこと

世界的には、オンライン診療をはじめとしたデジタル活用の報告が増えている。我々が実施した臨床研究でも、その効果は対面診療よりも優れ、安全性も同等だった。家庭血圧テレモニタリングを伴うオンライン診療のエビデンスは確実に積み上げられており、現状、医療のデジタル化に端緒を付ける最良の選択肢と考えられる。しかし、日医総研のワーキングペーパーには、「D to Pのオンライン診療は、短期的には導入に際しての説明や確認等に時間を要し、直接的な働き方支援とはならない」とある。医師の負担が逆に増える上、時間当たりの報酬が下がるから導入に消極的、ということを示唆している。現にCOVID-19対応の規制緩和下においても、オンライン診療の実施は月間わずか2000件程度にとどまる。また、セカンドオピニオン外来にオンライン診療を導入した例では、対面に対し1.5倍の価格（30分33,000円）の設定であり、デジタル化はむしろコスト高という矛盾が生じている。丁寧に診ることが医療の大前提である一方、低価格短時間でも一定の品質が保証されたサービスを提供する方法を探る必要がある。

2 患者が学ぶべきこと

我々の行ったアンケートでは、高血圧のケア・治療を始めるまでに要した期間は3年以上と答えるものが多かった。検診で160/100 mmHg以上となり、やっと受診勧奨がかかったにも関わらず、更に3年放置してしまえば、治療のハードルはますます高くなる。「薬に頼りたくない」という患者も多いが、ならばより早い段階で適切な対応を行わなければ難しい。140/90 mmHgを超えたら要経過観察ではなく、すぐに対応が必要な高血圧であるという啓蒙を行う必要がある。更に、120-139/70-89 mmHgの血圧は“高値”であることを知らせるために、ヘルスリテラシーとセルフケアの向上に使えるデジタルコンテンツの充実を図るべきだ。

費用面にも課題が多い。通院不要になるとしたら、どれだけの追加費用を許容できるかとの問いに対する答えは、-2,000円から+2,000円までと幅広い。高血圧のオンライン治療を

自由診療で実施する場合、1か月あたり3,000円程度を全額自己負担していただいている。これを高いと感じるなら、医療を水道水か何かと勘違いしているのではないかと申し上げたい。平均的な家庭の上下水道料金は月約5,000円だ。コロナ下で臨時に保険適応となっているオンライン診療は、3割負担なら1回423～846円であり、ロードサイドで売られている弁当レベルである。外来診療のデジタル化を推し進めるには、一律に3割しか負担を求めないというスタンスは放棄した方が良いのではないか。追加負担によって付加価値の高いサービスの造成を認めるのは、民主主義と自由経済国家のあり方に矛盾しない。1錠10円の降圧薬を購入するために、半日近い時間をかけて5分の診療を受けるというのは、何かの罰ゲームにも思える。400円の牛丼を食べるために、半日列に並んだら会社はクビである。3,000円払うので通院は御免こうむりたい、セルフケアもしっかりするので、オンラインで十分という声に応えるのは不平等なのだろうか？

3 行政や経営の観点から見た環境整備について

脳卒中・循環器病対策基本法が施行され、行政も企業も高血圧対策への注力が求められる。我々が行った調査では、健康寿命の延伸や合併症予防の観点から、高血圧対策が最も重要であるということを知っていたのは健保担当者の3割未満である。最近の研究では、特定保健指導の効果は一時的な体重減少のみであり、血圧にはなんら影響を及ぼしていない可能性が報告された。限られた予算をどの施策に集中すべきか、自治体も企業も、正しい戦略立案と経営判断をすべきだ。我々は、会津若松市をフィールドとして、都市OSにヘルスケア機能を建付け、-1次予防から2次予防までのレイヤーをデジタル化するスーパーシティ構想を打ち出している。

産学官が一体となって取り組むデジタル化をフックとして、多くの生活者に手を差し伸べる仕掛けを講じることが、逆説の打破に必要不可欠な戦略である。そして最後に、必要なことは叙述ではなく、実装であることを意識したい。